



## 1 ひやくまん穀は土づくりから

「ひやくまん穀」の多収という特性を十分発揮させるためには、土づくりは必須です。昨年の収穫後に次の①～④の土づくりを行いましたか？

- ① 作付予定のほ場の土壌分析を実施し、土壌状態を把握している。
- ② 作付予定のほ場は10月末までに秋耕し、稲ワラは全量すき込んだ。
- ③ 秋耕しは作土層が15cm以上になるよう深耕した。
- ④ 土壌分析結果に基づき、土壌改良資材またはたい肥の散布を行った。

もし、まだ土づくりを行っていない場合は、次の対策を行ってください。

- ⑤ 土壌改良資材(田の恵 60kg/10a)を施用する。
- ⑥ 作土層が15cm以上確保できるよう荒耕起を行う。



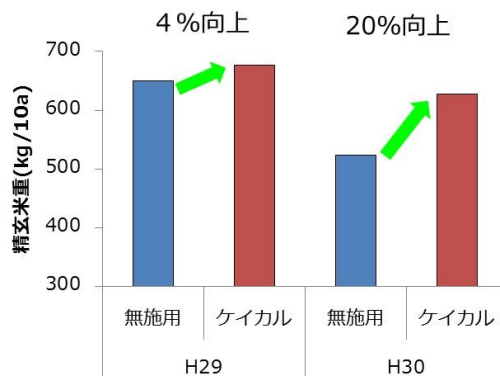
田の恵  
(バランス型)



ようりん  
(リン酸型)



ケイカル  
(ケイ酸型)



ケイ酸不足のほ場ではケイカル施用で増収効果を確認

## 2 作付ほ場の選定

「ひやくまん穀」の目標収量660 kg/10aを実現させるためには、ほ場の選定も重要になります。以下の要件を満たしたほ場で作付していますか？

- ① 用水がひやくまん穀の収穫直前(9月中旬～下旬)まで十分確保できる。
- ② 風通しが良く、日照を十分確保できる(山影でない)。
- ③ 均平が取れていて水持ちが良く、地区の平均単収以上が安定して穫れる。
- ④ ほ場整備後3年以上経過しており、地カムラは解消されている。

# 3 5月連休中の田植えのため計画的は種

## (1) 登熟に必要な気温と日照を確保する

ひやくまん穀は出穂時期が遅くなると、登熟に必要な気温と日照が得られず、登熟不良により収量や品質が低下します。

そのため、8月10日までに収穫させることが必要になります。

1.6 MJ/m<sup>2</sup>以上必要

## 5月連休中に田植えを行う

出穂期	出穂後30日間日射量(MJ/m <sup>2</sup> )			
	小松市	金沢市	羽咋市	輪島市
8月5日	18.0	17.6	17.5	17.1
8月10日	17.2	16.8	16.7	16.4
8月15日	16.4	16.0	15.9	15.5
8月20日	15.6	15.1	15.0	14.7

8月10日出穂で日射量が確保される

## (2) 5月連休中に元気な「稚苗」を植える

ひやくまん穀は穂数(茎数)が取れにくい品種特性があります。遅く(6月20日以降)に分げつした茎は、穂になりません。穂数不足は減収します。

6月20日までに茎(穂)を確保するため、田植え後の活着と初期生育を良くする。

元気な「稚苗(葉齢2.5L)」を5月連休中に田植えする



5月連休中に元気な「稚苗(葉齢2.5L)」となるように、

## 種播きの日程を調整する

(育苗期間は1か月以内)

播種	田植	育苗日数
4月10日	5月1日	21
4月13日	5月3日	20
4月18日	5月6日	18

## 平成31年春の農作業安全確認運動(3~5月)の実施について

「公道での農機事故は安全確認と予防対策で防げます！」

トラクターによる死亡事故の多くは、ハンドルやブレーキの操作を誤って公道から逸脱し水路へ転落することや公道を走行中に後続車に追突されることが原因となっています。

トラクターによる死亡事故対策の3つポイント

- ① シートベルトの着用と安全キャブ・フレームの装着
- ② ブレーキ連結の確認
- ③ 低速車マークや反射板の取り付け

